様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：５４５０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００３０７

研究課題名（和文）北村季吟の京都地誌『菟芸泥赴』に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A philological research on "Tsuginefu", a guidebook of Kyoto in the 17th century written by Kitamura Kigin

研究代表者
土居　文人（DOI, Fumito）

神戸市立工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：２０３００６００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　600,000円

研究成果の概要（和文）：北村季吟の写本京都地誌「菟芸泥赴」についての文献学的研究を実施した。京都大学附属図書館蔵本と国立公文書館内閣文庫蔵本（172-0145）のテクストが細かいレベルで類似しており、本書のより自筆本に近い本文推測にはこれら2本と、内閣文庫本（172-0150）・国会本の比較が有効であることがわかった。所蔵館の事情のため未調査となった無窮会神習文庫蔵本（3-1-2-5672）と合わせて、これら5写本により本書の翻刻を作成できることが明確になった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
17世紀末の京都地誌（京都案内記）「菟芸泥赴」の国内に所蔵されている写本について、古い形態を持つ写本と後世の写本を判別するための指標が確認された。また、1914-1917年に出版された「京都叢書」でおこなわれた「菟芸泥赴」の翻刻の不備を訂正し、より北村季吟の執筆した「菟芸泥赴」に近い本文の翻刻を実現するための資料の整備がおこなわれた。

研究成果の概要（英文）：A philological study was conducted on the manuscript of Kitamura Kigin "Tsuginefu", a Kyoto guidebook in the 17th century. The texts of the Kyoto University Library collection and the Cabinet Library collection in the National Archives of Japan (172-0145) are similar at a fine level, and it is assumed that these two books are more similar to the manuscript written by Kitamura Kigin. It turned out that the comparison of these two books and the Cabinet Library collection (172-0150), National Diet Library collection is effective in reconstructing the text of "Tsuginefu". Together with the uninvestigated Mukyukai Kannarai Bunko Collection (3-1-2-5672) due to the circumstances of the holding building, it has become clear that these five manuscripts can be used to create a reprint of "Tsuginefu".

研究分野：日本近世文学、国語学史

キーワード：京都地誌　北村季吟　文化史　教養　写本

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

旅行と交通、そしてメディアの発達とともに、江戸時代には名所案内記・道中記などの旅行・観光のガイドブックが出版された。このジャンルについては、国文学・人文地理学・歴史学・観光学などの研究分野が、各自の切り口と方法で取り組む研究テーマとして研究が進められている。

国文学における江戸時代京都の地誌・名所案内記研究については、『新修京都叢書』(1967-69) 所収の野間光辰の解題から本格的な研究が始まったと言うことができる。しかし、『新修京都叢書』の翻刻テクストは大正時代の 1914-17 年に刊行された『京都叢書』をもとにしたものであり、当時の翻刻・編集作業の不徹底のため誤字脱字などの不備が多く、テクストとしての信頼性が不十分なものであった。その後、『近世文学資料類従』古板地誌編（1975-81）の刊行によるテクスト（影印のみ）の整備を経て、現在、さまざまな図書館の Web サイトで江戸時代京都名所案内記のデジタル画像資料の公開が進みつつあり、研究のためのテクストが充実してきている。

『菟芸泥赴』（貞享元年 1684 成立）は、江戸時代前期における第一級の文化人であった北村季吟の著した京都地誌である。同時代の成立の貝原益軒『雍州府志』（貞享三年 1686 刊）同様の総合的地誌であり、山城国の名所を索引として和歌などの古典文学の知識に至る教養書的性質を持っている書物である。テクストに関しては、出版されずに写本で伝わったため、10 本程度の諸本（国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによる。これ以外の写本も存在する）が各地に散在する状況である。この諸本調査の不便さゆえ、本書の文献学的研究は『新修京都叢書』第 12 巻の野間光辰の解題（1971）以降、まったくおこなわれていない。そして、『京都叢書』(『新修京都叢書』第 12 巻も同様）の翻刻の底本に使用された写本は京都大学附属図書館蔵本であるが、前述の野間光辰の解題（1971）によると、これは誤脱の多い信頼できない本文を持つ写本である。『菟芸泥赴』は信頼できるテクストが明確になっていないため、近世京都地誌・名所案内記研究を始めとした諸分野の研究だけでなく、一般向けの京都案内書の記事にも利用しづらい現状であった。

２．研究の目的

上記の現状を解決するために、私は、2012 年に『菟芸泥赴』の文献学的研究に着手した。その成果の一部は、2013 年 4 月に開催された「京都近世小説研究会」（於、同志社女子大学）において「北村季吟の京都地誌『菟芸泥赴』について」という題目で口頭発表をおこなった。そして、学術雑誌『国語国文』第 86 巻第 5 号（京都大学文学部国語学国文学研究室編、2017 年 5 月）で諸本のテクストの性質について明らかにしてその分類をおこなった。

今回の平成 30（2018）年度からの研究（以下、「本研究」と記す）では、『菟芸泥赴』の文献学的研究を進展させ、

(a) 書物のサイズ（大本、縦 27×横 19cm 程度)、本文の行数（毎半葉 12 行)・改行箇所がほぼ同じであり、非常に近い近縁関係にある諸本と考えられる「京都大学附属図書館蔵本・国立公文書館内閣文庫蔵本 A（172-0150)・国立国会図書館蔵本・無窮会神習文庫蔵本（3/1/2/5672)」の 4 写本の本文と、後世の筆写者による丁寧かつ良質な校訂が入っている東京国立博物館蔵本の本文を対照した上で、『菟芸泥赴』の定本となる翻刻テクストを作成すること

(b)「見出し項目の一覧・索引（五十音順)」の作成

(c)「本文中の引用文献索引（五十音順)」の完成

(d)「人物名・地名などの総索引」の作成

をおこない、さらに、(c) の作業通じて、『菟芸泥赴』に流れ込んでいる古典的教養の全体像を明確にして『菟芸泥赴』文化史的意義について考察をおこなうことを目的とした。

３．研究の方法

写本テクストの研究であるため、まず、諸本調査と本文資料の入手・整理をおこなった。具体的には、より古い形態と本文を持っている可能性がある重要な諸本である「京大本・内閣文庫本 A・国会本・無窮会本」（以下、「京大本系」）の本文資料の入手である。そして、欠巻があるが、京大本系諸本同様の古い本文を持っている可能性がある諸本である国立公文書館内閣文庫蔵本 B（172-0145。巻 4 下・巻 6 欠)・宮内庁書陵部文庫蔵本（巻 4 上下・巻 5・巻 6 欠）の本文資料の入手である。さらに、国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」に掲載されていない新しい写本の捜索をおこなった。また、地誌を中心とした江戸時代・近代の書物における『菟芸泥赴』の引用と紹介記事の有無について調査をおこなった。

そして、本文資料を入手した上で、次の上記⑴で述べた (a) ～ (d) の研究を進行させた。(a) については、最も古い形態を持つ写本と想定される京都大学附属図書館蔵本を底本とし、京大本系を中心とした他本によって校訂する形で『菟芸泥赴』の定本となる翻刻テクストの作成に着手した。(b) については、見出し項目一覧を作成し、同時代の京都の絵図や地誌類などを参照して、見出し項目の配列が何らかの意味を持つ可能性の有無についての解明を試みた。(c) については、

北村季吟による京都の名所旧跡の実地調査の記述の抽出と、『菟芸泥赴』執筆に使用された資料一覧作成をおこなった。(d) については『新修京都叢書』新索引（2006 年）を参照して項目を抽出した。

４．研究成果

諸本調査と本文資料の入手については、京大本・国会本・宮内庁本のマイクロフィルムの作成による本文資料の入手、内閣文庫本 A・内閣文庫本 B の写真撮影によるデジタルデータの入手をおこなった。

また、諸本調査の過程で国文学研究資料館 Web ページ「日本古典資料調査記録データベース」によって所蔵を確認した三井文庫蔵本（C241-18）の調査を実施した。以下に簡単にその結果を記す。

・残欠の状態: 8 巻 3 冊の完本。
・奥書の筆写年と筆写者名: 「享保九年三輪左右子/享保二十一年片岡呉雪/元文元年」。
・巻八末尾付録「元禄七年賀茂葵祭再興」記事の付加: あり。
・巻八末尾付録と奥書における「文政十三年」書込付加: なし。
・巻二「七条道場」・巻四下「東三条森」・巻一「中山社」・巻四上「興聖寺」における落丁・一行脱落: なし。
・巻五「実相院」（本文記述なし）の注記: なし（空白）。京大本系では「本ノマヽ」と注記。
・序文の表現: 京大本系で「おほさゝきのみかとのきさいのみやのことのはなるを」と表記されている箇所で「ことのは」を「言葉」と表記。

これらは京大本系の特徴ではなく、射和文庫蔵本に見られる特徴であることから、三井文庫蔵本は京大本系ほど古い形態は保っていないが、巻八末尾付録「元禄七年賀茂葵祭再興」記事が付加されている写本としては古い段階の、筆写による本文の乱れが少ない写本に分類されることがわかった。

しかし、京大系の一つである無窮会本および、未調査の巻一のみ残存する無窮会神習文庫蔵本（3/1/2/5673）の調査と本文資料入手については、所蔵館である無窮会専門図書館の改装工事による閉館が継続しているため（2016 年度～現在）、本研究の研究期間内に実行できなかった。

入手した本文資料を使用して諸本テクストの比較分析を継続した。その結果、京大本と内閣文庫本 B のテクストが傍注などの細かいレベルで類似していることがわかった。そして、この内閣文庫本 B は、国会本・内閣文庫本 A よりも古いテクストの可能性があり、京大本を底本とした翻刻作成のために、国会本・内閣文庫本 A よりも重要な諸本であることが結論づけられた。また、宮内庁本については、筆写を重ねて崩れたテクストを再生するための校訂的合理化がおこなわれたテクストであり、東京国立博物館蔵本と同様の性格を持つものであることが明らかになった。

『菟芸泥赴』の研究史については、『編修地誌備用典籍解題』（初稿本・浄書本）巻四「別記第一 山城」に『菟芸泥赴』の解題が記されていることがわかった。

上記、研究目的の (a)「『菟芸泥赴』の定本となる翻刻テクストの作成」については、翻刻の凡例を作成し、京大本を底本として「京大本の誤記や脱落箇所については、内閣文庫蔵 A・内閣文庫本 B・国立本・宮内庁本・東博本で訂正・補足する」という方針で、全巻の草稿の作成が終了した。ただし、京大本系の諸本の本文を網羅的に集めることができていないため、定本となるテクストの作成ができず、草稿のままでとどまっている。同じ理由（データの不足）により、口頭発表・論文発表も実施できなかった。

上記目的の (b)「見出し項目の一覧・索引（五十音順）」の作成、(c)「本文中の引用文献索引（五十音順）」の作成、(d)「人物名・地名などの総索引」の作成については、着手したが、新型コロナウイルス感染症流行のため文献調査などの研究活動が停滞を余儀なくされたため、未完のまま終わった

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 京都大学文学部国語学国文学研究室編	４．発行年 2019年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 424
３．書名 京都大学蔵 穎原文庫選集 第十巻 地誌・随筆Ⅱ・総目録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関